



「二〇一八年七月十九日に一〇〇歳で急逝した脚本家、橋本忍。「羅生門」「生きる」「七人の侍」をはじめとする黒澤映画や「砂の器」「八甲田山」「私は貝になりたい」等、日本映画を代表する数々の脚本を執筆し、世界を魅了してきました。

故郷である兵庫県市川町では、橋本忍生誕一〇〇年を記念し、その世界に名だたる作品と人物を讃え、追悼の意を込めつつ、未来に繋げるための記念事業を展開しています。

「自分の作品のすべては、子供のとき、郷里・市川の川の流れを仰向きに泳いで流れながら、見上げた空の雲、その様々な雲の形の中にすべてがある。」

橋本氏はこう語っています。

橋本忍シネマシナリオフェスティバルでは、同氏の人や作品にまつわる様々なエピソード、制作の裏話などを、ゆかりの映画関係者などに語っていただきます。同時に次の一〇〇年に想いを馳せ「橋本レガシー」が若い世代や、地域社会の創生・再生にどのように継承され、影響を与えていくのかを、気鋭の映画監督や地域創生に携わる専門家も交えて検証します。



橋本忍 シネマシナリオ フェスティバル 生誕100年記念

シンポジウム

橋本忍生誕100年

理不尽への怒りと狂気に至る世界

～橋本忍脚本の魅力と影響力～

基調講演 中島丈博（脚本家）

平成30年 11月11日（日）

午後1:00 開場 午後1:30 開演

会場：市川町文化センター ひまわりホール



基調講演・パネリスト
中島丈博



パネリスト
高橋信裕



パネリスト
渡辺紘文



パネリスト
榎田竜路
メディアプロデューサー、朝日新聞記者、映画評論家
(合)アースボイスプロジェクト代表社員



司会
石飛徳樹

参加無料
定員500名

公式サイト：hashimotoshinobu100th.com

橋本忍 生誕100年記念 フェスティバル シネマ・シナリオ

シンポジウム

橋本忍生誕100年
理不尽への怒りと狂気に至る世界
～橋本忍脚本の魅力と影響力～

基調講演 中島丈博（脚本家）

平成30年11月11日(日)

午後1:00 開場 午後1:30 開演

会場：市川町文化センター

〒679-2315 兵庫県神崎郡市川町西川辺 715



◎お問い合わせ

橋本忍生誕100年記念事業実行委員会事務局
(合同会社アースボイスプロジェクト内)

Tel: 0467-24-1740 Email: info@ev-pj.com

市川町役場 地域振興課

Tel.0790-26-1015 Fax. 0790-26-3121



◆公式サイト：
hashimotoshinobu100th.com



基調講演・パネリスト

中島丈博（脚本家）

1935年、京都市生まれ、高知県中村市（現在の四万十市）に疎開。57年、シナリオ作家協会シナリオ研究所第1期生。修了後、橋本忍氏に師事。61年『南の風と波』（東宝映画・橋本忍監督）を師と共に作。75年『祭りの準備』（ATG・キネマ旬報脚本賞、毎日映画コンクール脚本賞）、98年『あ、春』（松竹・毎日映画コンクール脚本賞、ベネチア国際映画祭批評家特別賞）ほか。テレビ脚本に87年『絆』（NHK・芸術選奨文部大臣賞）、89年『恋愛模様』『海照らし』（NHK・第八回向田邦子賞）など。大河ドラマは『草燃える』ほか4本を執筆。脚本監督作品に『郷愁』『おこげ』、99年紫綬褒章、2007年旭日小綬賞。昼ドラ『真珠夫人』『牡丹と薔薇』はそのドロドロ愛憎劇が社会現象となる。小説00年『野蛮な詩』（角川書店）、17年『ITSUKI 死神と呼ばれた女』（文藝春秋刊）発表。



パネリスト

高橋信裕

（博物館学、高知みらい科学館館長、元文化環境研究所所長、元常磐大学教授）

1948年生まれ、高知県宿毛市出身。高知県観光特使、高知みらい科学館館長。慶應義塾大学文学部卒業。卒業論文『伊丹万作とその世界』により万作関係者で讃美される「板万会」との縁ができる、橋本氏との付き合いが始まる。卒業後（株）乃村工藝社に入社、シンクタンク・文化環境研究所長に就任。地域おこし、ミュージアム経営論、展示論を専門に、各地の博物館・記念館等の設立に尽力すると共に慶應大学、早稲田大学、法政大学、國學院大學、常磐大学等で教鞭を執る。

橋本忍記念館設立の際、資料整理、保管資料の考証、展示計画、データベース化、『橋本忍人とシナリオ』の復刊等を行い、プロデューサー的役割を果たす。



パネリスト

渡辺紘文（映画監督）

1982年栃木県大田原市生まれ。映画監督、脚本家、プロデューサー。日本映画学校にて天願大介監督に師事。2009年、日中韓共同横浜開港150周年記念映画『3つの港の物語』日本篇『桟橋』監督。色川武大の遺稿『狂人日記』の舞台化などを経て、13年、故郷にて弟・音楽家の渡辺雄司と共に映画制作集団大田原愚豚舎を旗揚げ、第一回作品『そして泥船はゆく』が第26回東京国際映画祭他世界各国の映画祭に出品される。以降15年『七日』、16年『プールサイドマン』、17年『地球はお祭り騒ぎ』とデビュー以来4作連続で東京国際映画祭日本映画スプラッシュ部門に出品され、注目を集め。特に『プールサイドマン』では、第29回東京国際映画祭日本映画スプラッシュ部門作品賞受賞他、カルロヴィ・ヴァリ国際映画祭、ユーラシア国際映画祭出品、NIPPON VISIONS JURY AWARD受賞など、国際的にも好評を博した。

大田原愚豚舎 <https://foolishpiggiesfilms.jimdo.com>



パネリスト

榎田竜路

（メディアプロデューサー、（合）アースボイスプロジェクト代表社員）

1964年生まれ、神奈川県出身。法政大学経済学部卒業。メディアプロデューサー、音楽家。北京電影学院客員教授、（合）アースボイスプロジェクト代表社員、NPO法人映像情報士協会理事長。公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会経済・テクノロジー専門委員。専門の一つ、身体技法の研究から日本の伝統文化の底に息づく「型」に着目、人の感覚を引き出す働きを応用し、地域情報のグローバルな展開を支えるメディア手法や、地域や企業の情報をプロデュース出来る人材の育成手法「認知開発®」を開発、全国に展開中。

アースボイスプロジェクト <http://ev-pj.com>



司会

石飛徳樹（朝日新聞記者、映画評論家）

1960年、大阪市生まれ。神戸大学法学部卒業。84年、朝日新聞社入社。現在、東京本社の文化くらし報道部で主に映画を担当。カンヌやベネチアなどの国際映画祭や米国アカデミー賞のリポートも行っている。2001年から10年余り、キネマ旬報誌で「テレビ時評」を連載した。著書に新聞の連載を集めた『名古屋で書いた映画評150本』（徳間書店）、編著書に高倉健の最後の映画を扱った『もういちどあなたへ』（朝日新聞出版）。

* 敬称略、順不同

参加無料
定員500名